

臨床心理を学ぶ大学院生の乳児保育体験

—— 体験レポートにみる大学院生への効果 ——

中 津 郁 子

(キーワード：乳児保育体験，乳児の泣き，KJ法)

I. 問題と目的

現在，核家族化・少子化の影響で，青年たちが子どもとかかわる経験は少なくなっている。自分の子どもを産むまでに，小さい子どもの世話をしたことがない母親が増加している（原田2004）といわれている。臨床心理士をめざす青年も同様，子どもとかかわる経験が少なく，その関わり方に悩むことが多いのも現状である。

本大学の臨床心理士養成コースでは，医療や教育，福祉などの分野で臨床心理士として働く人たちを養成している。臨床心理士は心に悩みを持つ人たちに接し，心理療法によってその回復力を助ける。心理療法には様々な方法があるが，子どもたちに対しては主としてプレイセラピーがなされている。このプレイセラピーにおいて，セラピストには子どもが象徴的に表現するものを直感的に感じとる能力（感受性）が求められる。

児童心理療法の訓練の一つとして，ロンドンのタビストック・クリニックでビック（Bick,E）によって始められた，タビストック方式の乳幼児観察がある。衣笠・鈴木・渡辺（1994），阿比野（1997），山口（1999）らがこの乳幼児観察を紹介している。それによると，家庭での母子の生活を観察者が決まった時間に家庭訪問して，間近にしながら観察をするというものである。母子関係のやりとりを観察する中で観察者の感情も揺り動かされる。また，転移，逆転移への理解や，非言語でのコミュニケーションへの調律などを養うことにもなる。これらは，治療者の基礎的訓練として，重要なものである（山口1999）。さらに，山口（1999）は観察者の五感イメージが活性化され，身体表現による交流が観察者におこるといふ。渡辺（1994）は，間主観的（intersubjective）な交流を通して伝わってくる，乳幼児の対象関係の世界を観察するといふ。

神田橋（2006）は，精神療法の技術で重要なのは「読みとり」の技術であるとし，それは，「感じる」能力であるといふ。そして日常生活の中で五感イメージ・トレーニングを推奨している。そして，「関わる」「伝える」技術の修練として，五感イメージ・トレーニングと同水準の基礎トレーニングとしての，赤ちゃんや犬などの，ことばの通じない，しかしノン・バーバルなコミュニケーションは伝わる相手に話しかけることを推奨している。

そこで，臨床心理を学ぶ大学院生たちが，乳幼児を観察したり，かかわったりする場所として保育園に協力をお願いした。保育園での乳幼児とのかかわりを通して子どもへの理解を深め，臨床的な感性を磨くことを目的として乳児保育体験を行った。本研究では保育体験での大学院生への効果及びその効果的な方法を検証する。

II. 方法

1. 対象及び実習の方法

法人保育園の協力を得て，希望する大学院生11人（臨床心理士を目指す学生）に3日間の乳児保育体験（0歳児クラスと1歳児クラス）を行った。期間は2006年8月から9月である。時間は9時から15時までである。乳児が保育園にやって来て，授乳や食事，オムツ替え，遊び，午睡などをし，登園してから降園するまでのほぼ一日実習を行った。観察中にメモは取らず，保育士の指示に従いながら，食事の介助やオムツを替えるなどを行った。乳児と共に過ごしたりすることとした。また，一日の実習が終わると，簡単なその日の生活や疑問などの記録を提出して帰るようにし，疑問に関しては保育士からの助言を受けることになっていた。

今回の保育体験に関しては，保育園側の受け入れも初めての事であるため，筆者は保育園側との打ち合わせを数回行った。院生に対しては，事前指導として保育園に関する説明や乳児の発達等に関する学習を行い，保育園での保育や乳児の生活に対する支障がないことを第一に考慮した。

2. 分析方法

①保育体験後に6項目の質問紙調査を実施し分析した。調査内容は、「過去の乳児との接触経験」、「乳児に対する思いの変化」、「心理の仕事への有効性」についてである。

②次に、保育体験後のレポートを分析した。レポートは一人につきA4用紙で2～5枚の分量であった。様式は特に指定せず、それぞれが保育体験で感じたことや考えたことなどを自由に記述させた。そのレポートをKJ法に準じて分析をした。乳児の生活と自分の感想とをはっきり区別して記述してある場合は、感想の部分を分析対象にした。原則として一文一記述とし、内容のまとまりによって分割した。それらをカテゴリーに分け分類した。一つの記述内に複数の内容が含まれる場合は複数のカテゴリーに入れることとした。このカテゴリー分けに関して、乳児の生活に関することは保育所保育指針を参考に行った。また、子育て支援に関する業務を行っている臨床心理士2人にも協力を依頼し分析した。

Ⅲ. 結果

1. 質問紙調査の結果

(1) 乳児との接触経験

保育体験以前に乳児と触れ合う経験があったかどうかを聞いたものでは、「イ、まったくない」が5人(45.4%)、「ロ、少しはあった」が6人(54.5%)、「ハ、割とあった」「ニ、かなりあった」はいずれも0人という結果だった(回答数は11人。以下同数)。

「少しはあった」と回答した人の、具体的な場面では、「ボランティア先の保育園」「妹・年下のいとこ、知り合いの子どもとの触れ合い」などであった。

(2) 乳児に対するイメージや気持ちの変化

保育体験を通して、乳児に対するイメージや、思い、気持ちに変化があったかどうかを聞いたものでは、「イ、変わらなかった」が0人、「ロ、少し変化した」が1人(9.1%)、「ハ、割と変化した」が5人(54.4%)、「ニ、かなり変化した」が5人(54.4%)という結果だった。

具体的にどういうところが変化したかを聞いたものでは、乳児の印象が「かわいいというだけから、子育てを行う立場としての大変さを少し意識できた」という内容のものや、その大変さを母親の思いにまで言及しているものなどが5人。何もできないと思っていた乳児が「自分の意思を伝える力を持っていること」や「いろんなことができるんだ」など、乳児の力を知ったことによる自分の変化を言及していたものが4人。自分の受け止め方が、「ありのまま受け止められるようになった」「発達段階という視点をもってかかわることができた」「子どものところに寄り添っていく感覚を感じられた」などに変化したという人が3人(複数回答)見られていた。

(3) 心理療法の仕事への有効性

将来臨床心理士になった時に、この保育体験は役立つかどうかを聞いたものでは、「イ、まったく役に立たないと思う」が0人、「ロ、少しは役に立つと思う」が1人(9.1%)、「ハ、とても役に立つと思う」が10人(90.9%)、「ニ、わからない」が0人であった。その理由に関しては、例えば、「お母さんの気持ちに、ほんの少しでも共感できるような気がします」や「乳児をもつ親のイメージができました」などと言うように、育児の大変さや親の気持ちを感じたことで、心理士として親と関わる時や子育て支援に生かしていけるという意見が7人だった。また、人とのかかわり方や非言語でのかかわりに言及して、それが「心理士として相手の気持ちを汲み取るという点で有意義」「人とかかわることの、根本的なところを体験できた」などとする意見などが4人みられた。

2. KJ法による結果

実習後の簡単な調査では、この乳児保育体験が個々に意味のあるものとなっているようだった。そこで、レポートを分析することで、具体的にどのような体験になったのかを検討した。

(1) 内容の分類に関して

内容を分類すると、表1のように「その他」を含めて8つの上位カテゴリーと21の下位カテゴリーに分かれた。上位カテゴリーでは、記述の多い順に見ると、「情動的経験や体験」(315)、「乳児の特徴」(244)、「乳児の生活習慣」(171)、「保育士や保育方針」(113)、「事実」(98)、「自己省察」(93)、「親への思い」(21)、「その他」(7)の順となっていた。

(2) 上位カテゴリー別の内容

ア. 「情動的経験や体験」

このカテゴリーに含まれるのは、5つの下位カテゴリーであった。「否定的な感情」と「肯定的な感情」に関してはどちらかに分けにくいものもあったが、その場合は両方に入れた。

最も記述が多かった下位カテゴリーは、「乳児の泣き」(74)に関してである。例えば、「まったく泣き止まない子に戸惑いを感じた」や「人見知りしたらしく泣き出して止まらなくなった」などの戸惑いや困惑の記述や、「泣くことは悪いことではなく、泣いて育っていくからと先生から言葉をいただき納得しました」や、保育士からの助言で赤ちゃんが泣きやんだことなどの学びなどであった。

次いで多かったのは、「乳児への思いや感情」(70)に関するものである。例えば、「今まで思っていた0歳児のイメージが大きく変わったように思う」や「大人にとっての何気ない段差が子どもにとっては大きな壁であることを思い知らされた」などの乳児に対する気持ちの変化や発見。「子どもに今ある力は何か、今引き出せる力は何であるかということを考えながら、子どもたちとかかわっていくべきであると感じた」などの気づきなどが見られていた。

次いで、「否定的な感情」(68)である。これは、「異世界に入ったように、自分が何をして良いかわからない状態だった」や「おもちゃの取り合いはどう対応しているのかわからず何も出来なかった」や、「けんかの仲裁と、後片付けの指導の難しさを最も実感」のような子どもへの対応に関する不安や戸惑い、対応への難しさや余裕のなさを記述したものの。「勉強になったというより、しんどさ、疲れの方が大きかった」「寂しい気持ちになりました」などの感情などが述べられていた。

「抱く」(56)では、「赤ちゃんが私にぴったりとくっついてトロンとしていると、なんだか自分も心地よい気分になり……」というような肯定的な感情や、「どう抱けばいいのかすらわかりませんでした」という戸惑い、「抱っここの仕方ひとつで子どもの反応がまったく違った」という発見など、抱っこにまつわる気づきや感情が記述されていた。

「肯定的な感情」(47)では、「凄く嬉しい体験だった」「子どもが大好きと改めて感じた」や、「最後は自分の腕の中で眠ってくれるのを見るとかわいらしくて愛おしく感じた」というような肯定的な感情が記述されていた。

イ. 「乳児の特徴」

下位カテゴリーは6であった。その中で最も多かったのは、「環境とのかかわり」(86)に関することだった。例えば、「カーテンで遊ぶのも子どもにとってとても楽しいことだと思う」や「坂道を転がる木のおもちゃや、トンボがゆらゆらするおもちゃをじーと目で追っている」というような保育園の環境と乳児とのかかわりに関する発見や、「何回もそれが繰り返されて遊びが長続した」などの遊びの様子に関する記述や、「これまで子どもと遊ぶ時は受身が多かったが、こちらからの語りかけやおもちゃの提示で能動的に、一緒に遊んで楽しむことができることも感じた」などの遊びに関する発見の記述などが見られていた。

次いで、乳児の「行動・表情・態度」に関すること(49)。例えば、「目が合うとにこっとした」や「指すいをしたり、時折手足をばたばたさせる」などである。

「発達」(32)では、「1歳児クラスはいろんなことができるんだ」など、0歳児と比べて1歳児の成長として気づいたことや、月例によってその発達に違いがあることなどの記述が多かった。

「人間関係」(32)は、「1歳児の間ではおもちゃの取り合いが早速起こっていた」や、子ども同士の相互交流の様子などであった。

「言葉」(27)では、「なんとなく聞き取れる言葉を返したり、遊びにまつわる言葉を返したりしていました」という子どもの様子や、「場に応じた声かけが必要と思った」などの言葉に関する気づきなどであった。

「個人差・男女差」(18)では、「幼児が外で遊んでいる姿には子どもの個性が強く出ている」や「どちらかという、男の子の方がおっとりしている印象だった」などが見られていた。

ウ. 「乳児の生活習慣」

下位カテゴリーは5であった。最も多く記述が見られていたのは、「授乳・食事」(94)に関することであった。例えば、「8ヶ月の子に離乳食をあげさせてもらいました」という体験や、「赤ちゃんにミルクをあげるのは初めてでどきどきする」などの体験が見られていた。

「睡眠」(50)では、「リズムをとりながら寝かしつけた」や「ベットに移す時、目を覚まさないかどきどきして、そーと寝かせる」などの体験の記述などであった。

「安全」(16)では「事故を未然に防ぐ予測する力が大切だと思った」などの記述だった。

その他、「オムツ替え・着替え」(11)や「その他」(6)の生活習慣に関する記述が見られていた。

エ. 「保育士や保育方針」

下位カテゴリーは、2である。「保育士」に関することは(105)見られていた。これは、下位カテゴリーの中では、最も多いものだった。その内容は、「抱き方から教えてもらった」、「人見知りするということを保育士の方が教えてくださった」など、保育士から学んだことや教えられたことなどの記述が多く見られていた。また、「保育士さんが膝に乗せて、落ち着くまで声をかけたり、おもちゃを見せて遊びに誘導する」など、保育士さんがしていることを観察したり、「保育士さんは子どもが何を欲しているか感じ取っていてすごいと思った」などの保育士の専門性への賞賛も見られていた。「子どものお昼寝が保育士さんのやすらぎの時間のようだ」というように保育士の様子についての客観的な記述も見られた。

「保育園や保育方針」は、「これほど人員・設備が整っている園は珍しいのではないかと思った」など(8)であった。

オ. 「自己省察」

下位カテゴリーは3である。「自己に対する気づきや感想」(72)では、「実際にかかわることほど勉強になるなど当たり前のことを実感した」や、「人を一人産むとといったことの重さを再確認した」のように保育体験を通して感じたことや自己に対する気づきが記述されていた。

「過去の経験」(11)では、「乳幼児とこれほど長い時間一緒に過ごすことは初めてだった」などの過去の経験に言及した記述が見られていた。

「未来の自分」(10)では、「この体験を今後も大切にしたい」など、未来の自分に言及していた。

カ. 「事実」

このカテゴリーには、「検温を頼まれた」、「IちゃんとAちゃんが登園した」などの状況や事実を淡々と記述してあるもの(98)を入れた。

キ. 「親への思い」

「子育てをしているお母さんに素直に尊敬の念を覚えた」などの親への思いや、「人と接する仕事では目の前の人を大切に思うことが互いの気持ちを通い合い、信頼につながるものだと思う」など、カウンセラーへ言及している記述(21)も見られた。

ク. その他

「猫に関するテレビ映像を思い出した」のように、以上のどのカテゴリーにも当てはまらないもの(7)が見られていた。

IV. 考察

1. 質問紙調査に関する考察

今回の保育体験に当たって、事前指導として行ったのは、子どもの発達や保育所の保育に関する内容のみであった。乳児保育体験に応募してきた学生は、別の期間で同じ保育園の幼児の保育(2歳児クラス・3歳児クラス)にも参加しており、乳幼児とのかかわりに積極的な学生たちであった。しかし、乳児と接する経験はやはり、半数のものがまったくなく、少しはある人も数日間の経験のみであったようだった。

保育体験後の、乳児に対する思いの変化に関しては、全員が変化したと答えていた。変化の方向は、何も出来ないと思っていた乳児がいろんなことができるというプラスのイメージに変化した人が半数。どちらかという、かわいだけでなく大変だなどというようにマイナスのイメージに変化した人も約半数であった。また、それらを含んで、「人間なんだな」とありのままを受け止めるように変化した人も見られていた。初めての経験に戸惑いや不安が強かった人もいたと考えられた。

将来の心理の仕事への有効性に関しては、全員が役に立つと回答していた。その理由は、子育てをしている親を理解することなどの子育て支援に関係することと、心理療法を行っていく上での基本となることに分かれていた。

2. KJ法に関する考察

保育体験後のレポートをKJ法に準じて分析したところ、8つの上位カテゴリーと21の下位カテゴリーが見られた。上位カテゴリーで最も多かったのは、「情動的経験や体験」であった。この体験を通して院生はかなり心が揺り動かされたことが想像される。特に乳児が見知らぬ人に対して「泣く」という状態が、院生にとっては戸惑いや不安を想起したようで記述が最も多かったと考えられる。期間が短期間であったことや、乳児の月齢によっては、毎日泣かれた状態で保育体験期間が終了してしまった学生もいたと思われる。

乳幼児にとって泣くことは、コミュニケーションの一つであり、気持ちの発散でもある。泣くという行為にはそこに何らかの意味がある。その気持ちを感じることや想像することが必要である。個々人がどのように、「泣き」に対していたかは、個別のレポート考察で探ってみたい。

初めて乳児に接する体験のものが半数であったことから、抱っここの仕方や授乳の仕方など、具体的な行動の仕方がわからないことに対する不安や困惑も見られていた。また、乳児に泣かれることも含めて、戸惑いや不安などのマイナスの感情の方がプラスの感情よりも多く見られたのではないかと考えられる。保育体験の中で、子どもの頃の自分が想起されるという経験をする人も考えられた。乳児が泣くということも、自分にひきつけての感情を記載していた人もいた。

上位カテゴリーの中で次いで記述が多かったのは、「乳児の特徴」に関するものだった。これは、乳児と生活する経験が始めての人もいたことから、それらが驚きであったり発見であったりしたことと思われる。

下位カテゴリーの中で最も記述が多かったのは、「保育士」に関すること（105）であった。保育体験中の戸惑いや不安を解消するためには、保育士をモデルとしたり、保育士から教えられたり学んだことが多かったことが伺えた。

3. 個別のレポートに関する考察

KJ法による分析から乳児の「泣き」に関する記述が多く見られていたことから、このことについて、個別のレポートから考察した。また、この乳児保育体験では、心理療法の基本となる感受性・想像力、情動調律も高まったと考えられる。このことについても考察した。

(1) 乳児の泣き

KJ法による分析により、乳児の「泣き」に対して院生たちは心を揺さぶられていることが考えられた。そこで個別にレポートを見ていくことで、院生が乳児の泣きにどのように対応していたかを考察する。

「泣き」に関する記述は全員に見られていた。そして、泣かれることで焦ったり、イライラしたり、不安になったりしていた。乳児が泣く理由には満足・苦痛・怒り・悲嘆の4種類ある（D.W. ウィニコット2003）という。乳児の「泣き」の原因を、「寂しさからか」「遊びに飽きたのか」など乳児の心を想像した記述のある人が5人（45.5%）、想像した記述は書かれていない人が6人（54.5%）だった。「泣かれると自分の対応じゃだめですよ」と言われたように受け取ってしまう院生もいた。

そして、泣きに対する対応は、まず全員が「抱っこ」をしてあやすという行動になっていた。そして泣き止むまで抱っこしていたり、その間に、話しかけたり、体をゆらしたり、リズムを取ってみたりといろいろな工夫をし、試行錯誤をしている人がほとんどだった。その間の思いは、乳児が「全身で自分の不快感を伝えようとしている」と感じたり、「自分の不安が子どもに伝わっているのでは」と自分に目を向けたりする。また、乳児の立場で「人見知りの生きた勉強をしていると思えるようになった」、「泣くことは子どもの仕事なので、いらいらせずどうして泣いているのかを考えることがとても大事だ」と客観的に考察したりしている人も見られた。そのように思えるようになったのは、ひとつには保育士からのアドバイスであった。子どもに応じた、安定するかわり方を助言され、泣き止ませることが出来ていた。泣き止んだ時には、嬉しさも大きかったと考えられる。「服がぬれていても、泣き止んでくれたことのほうが嬉しく思い、気にならなかった」と述べる院生もいた。

(2) 感受性・想像力

乳児との感情の交流は主に、行動・態度や表情などの非言語で乳児の思いや感情を汲み取っていくことから始まる。感受性を高めながら想像力を働かせていかなくてはならない。そのような体験に院生たちは四苦八苦していたようだが、実習を体験する中で、「言葉を話せなくてもなんとなく伝わるものがある」という記述をしていた人が4人見られていた。「こちらが、関わりたい、あなたのことが大切だという思いで関わっていくとしっかり実際に伝わっている」と感じる事ができた人もいた。神田橋(2006)の言う、「読みとり」や「感じる」能力が活性化されたようであった。

具体的な記述例では、乳児の泣きの原因を想像しているものや、乳児がしている容器の蓋をしめるという遊びの様子を見ていて「はっ!」と気づき、最初に自分が思っていた思いとずれていたことに気付いた記述。泣き止まない子を連れて廊下に出ると泣き止んだが、部屋に戻るとまた泣く。それを、「匂い」が違うことに気づき、「この子は匂いに反応したのか」と想像していた記述など、であった。

しかし、このような想像力を働かせた記述があまり見られなかった人もいた。淡々とした客観的な記述が多く見られていた。「子どもに必要以上の関わりをしないように」心がけていたようで、子どもを「観察するまなざし」(佐伯2007)で見つめていたことが多いようだった。

(3) 情動調律

D.N. スターンは乳児が7-9ヶ月を起点とする時期を主観的自己感の形成期とし、この時期に、相手の内的状態を汲み取り、情動の共有をはかることによって展開されるやりとりを情動調律(affect attunement)と呼ぶ。乳児とのやりとりにおいては、このような情動調律が見られていると考えられた。このことをレポートから検証した。

乳児と情動を調律しながら交流することは、院生たちの感情も活性化し楽しい体験であると考えられる。院生たちは多少なりとも、経験していたと思われたが、そのような体験を記載していたのは、2名のみであった。遊びの場面で交流や、10ヶ月の子の話している言葉を真似て語りかけたり笑ったりしながら交流している様子を記述しているものであった。

3日間だけの体験であり、初めて乳児と生活する人もいたことから、乳児の生活にかかわるだけで余裕を持たず、かわわりを楽しむことはできなかったのかも知れない。

V. まとめと今後の課題

心理臨床を学ぶ大学院生に3日間の乳児保育体験を行い、質問紙調査と体験レポートを分析することで、その効果を考察した。乳児保育体験後の6項目の質問紙調査では、将来の心理の仕事への有効性に関しては、子育て支援の観点からと心理療法の基本的な観点から、全員が役に立つと回答していた。

さらに、乳児保育体験後のレポートをKJ法に準じて分析した結果では、8つの上位カテゴリーと21の下位カテゴリーが見られた。上位カテゴリーで最も多かったのは、「情動的経験や体験」であった。特に乳児の「泣き」に関する記述が最も多かった。下位カテゴリーの中で最も記述が多かったのは、「保育士」に関することであった。保育士に支えられて、院生たちは乳児の泣きへの対応や世話をし、情動的な経験や体験を積んだりすることが出来ていた。しかし、「肯定的な感情」よりも「否定的な感情」の方が多いという結果であった。さらに、個別のレポートの分析では、心理療法を行っていくために基本となる感受性・想像力を働かせている様子が記述されていたのは4名であり、情動調律と考えられる記述は2名であった。

乳児保育体験は臨床心理を学ぶ大学院生にとって、情動を揺さぶられる体験となっていたようだが、体験期間やその方法に関しては再考の必要があるようだ。また、今回は体験後の話し合いの機会を設けることが出来ていなかった。「情動的経験や体験」の内容を十分に話し合い言語化することで体験は深まっていくと考えられる。事後指導の観点として、乳児の泣きや感受性・想像力、情動調律などが示唆された。

謝辞

大学院生の保育体験を快く受け入れてくださった保育園の職員の皆様と子どもたちに感謝いたします。また、乳児保育体験に参加し、質問紙調査への協力やレポートを提出し、この研究に協力してくださった院生の皆様に感謝いたします。

表 1. 乳児保育体験レポートの内容分析

上位カテゴリー	下位カテゴリー	内 容	記 述 例
情動的経験や体験 (315)	乳児の泣き (74)	乳児が泣くことに対する気づきや戸惑いに関する記述	人見知りしたらしく泣き出して止まらなくなった。
	乳児への思いや感情 (70)	乳児に対する思いや感情の変化や気づきなどに関する記述	大人にとっての何気ない段差が子どもにとっては大きな壁であることを思い知らされた。
	否 定 的 な 感 情 (68)	不安・戸惑い・難しさなどの否定的な感情の記述	異世界に入ったように、自分が何をして良いかわからない状態だった。
	抱く (56)	乳児を抱くことに関する気づきや経験に関する記述	抱っここの仕方ひとつで子どもの反応がまったく違った。
	肯 定 的 な 感 情 (47)	嬉しい・楽しいなど肯定的な感情の記述	最後は自分の腕の中で眠ってくれるのを見るとかわいくて愛おしく感じた。
乳児の特徴(244)	環境とのかかわり (86)	遊びや環境とのかかわりに関しての記述	坂道を転がる木のおもちゃや、トンボがゆらゆらするおもちゃをじーと目で追っている。
	行動・表情・態度 (49)	乳児の行動や表情、態度についての記述	嫌なものは保育士さんの手を押して意思表示している様子。
	人間関係 (32)	乳児の人とのかかわりに関しての記述	1歳児の間ではおもちゃの取り合いが起きていた。
	発達 (32)	年齢による発達に関する記述	今日は1歳児クラスに入ったのだが、入った途端に0歳児との成長の差を感じた。
	言葉 (27)	乳児の言語能力やコミュニケーションに関する記述	なんとなく聞き取れる言葉を返したり、遊びにまつわる言葉を返したりしていました。
	個人差・男女差 (18)	個人差や男女差に関する記述	幼児が外で遊んでいる姿には子どもの個性が強く出ていた。
乳児の生活習慣 (171)	授乳・食事 (94)	授乳や食事に関する記述	8ヶ月の子に離乳食をあげさせてもらいました。
	睡眠 (50)	睡眠に関する記述	ベッドに移すとき、目を覚まさないかどきどきして、そーと寝かせる。
	健康・安全 (16)	乳児への健康や安全に関する記述	事故を未然に防ぐ予測する力が大切だと思った。
	オムツ替え・着替え (11)	オムツ替えや着替えに関する記述	初めてオムツを替えるという体験をさせてもらった。
	その他 (6)	その他の生活習慣に関する記述	出来たことをほめることで、基本的な生活習慣もどんどん吸収されると思った。
保育士や保育方針 (113)	保育士 (105)	保育士の態度や保育士から学んだことなどに関する記述	保育士さんは子どもが何を欲しているか感じ取っていてすごいと思った。
	保育園や保育方針 (8)	保育園や保育方針に関する記述	これほど人員・設備が整っている園は珍しいのではないかと思った。
自己省察 (93)	自己に関する気づきや感想 (72)	実習の中で感じたことや自己に関する気づきの記述	実際にかかわることほど勉強になるなど当たり前前のことを実感した。
	過去の経験 (11)	過去の経験に言及した記述	乳幼児とこれほど長い時間一緒に過ごすことは初めてだった。
	未来の自分 (10)	未来の自分に言及した記述	この体験を今後も大切にしたい。
事実 (98)		状況や事実に関しての記述	IちゃんとAちゃんが登園。0歳児の組に入らせてもらった。
親への思い (21)		親の思いやカウンセラーに言及しているもの	子育てをしているお母さんに、素直に尊敬の念を覚えた。
その他 (7)		上記のいずれにも当てはまらないもの	猫に関するテレビ映像を思い出した。

引用文献・参考文献

- 阿比野 宏 1997 タビストック方式の乳児観察を通じて（その1）— 日本での経験から — 精神分析研究 41（5）pp.475-481
- D.N. スターン 2005 乳児の対人世界 岩崎学術出版社
- D.W. ウィニコット 2003 赤ちゃんはなぜなくの — ウィニコット博士の育児講義 — 星和書店 p.94
- 原田正文 2004 変わる親子, 変わる子育て 臨床心理学 Vol.4 No.5 pp.586-590
- 保育所保育指針 2001 フレーベル館
- 木部則雄 2007 こどもの精神分析 岩崎学術出版社
- 神田橋條治 2006 精神療法面接のコツ 岩崎学術出版社
- 衣笠隆幸 1994 タビストック・クリニックにおける乳幼児観察の方法と経験 乳幼児精神医学の方法論 岩崎学術出版社 pp.27-39
- 佐伯 胖編 2007 共感 育ち合う保育のなかで— ミネルブア書房 p.25
- 鈴木 龍 1994 乳幼児観察で見えるものは何か? 乳幼児精神医学の方法論 岩崎学術出版社 pp.40-51
- 山口義枝 1999 乳幼児観察の経験 身体交流の面から 心理臨床学研究 Vol.17. No.1
- 渡辺久子 1994 乳幼児観察 乳幼児精神医学の方法論 岩崎学術出版社 pp.53-66

Infant Nursing Experienced by Graduate Students of Clinical Psychology

— Effects of the experience on the students assessed from training reports —

NAKATSU Ikuko

(Keywords : infant nursing, infant cry, KJ method)

Graduate students, learning clinical psychology, experienced with nursing of infants for 3 days. After the 3-day experience, a questionnaire was filled in and a report on the experience was made by each student. The responses to the questionnaire and the reports submitted were analyzed to evaluate the effects of infant nursing experience on these students. In response to the question about the usefulness of this kind of experience on future psychological career, contained in the 7-item questionnaire, all students answered that the experience would be useful in deepening their insight into support to child care and basic aspects of psychotherapy. When the students' reports were analyzed by the KJ method, 8 upper categories and 21 lower categories were extracted. The most frequent upper category was "emotional experience." In this respect, the students most frequently referred to "crying" by infants. The most frequent lower category pertained to "kindergarten workers." In analysis of individual reports, the statements by 4 students suggested that these students exercised their sensitivity and imaginary power, which are fundamental means for psychotherapy. Two students made statements suggesting emotional rhythms. The results from this study suggest that important viewpoints for guiding students after this kind of nursing experience are those related to infant cry, sensitivity, imaginary power, emotional rhythms, and so on.